

研究論文

附属幼稚園実習の可能性

小田 進一・高橋 雅子

Future possibilities of Hokkaido Bunkyo College's
Kindergarten Observation

ODA Shinichi and TAKAHASHI Masako

1 はじめに

本学においては入学の早い時期に保育の現場を見学し、その後の学習に結びつけたいとの考えで1年次に附属幼稚園の見学（観察実習）をとり入れている。学園キャンパス内の同じ敷地に隣接する附属幼稚園での実習に期待を持って本学を志望する学生も少なくない。近年、教育・保育に寄せられる期待は保育者のあり方に向けられており、平成12年改訂の幼稚園教育要領でも教師自身の存在の持つ教育性と人・もの・ことをつなぐ役割の重要性を強調している。しかし、生活体験に乏しく、子どもと触れた経験のない学生が多い今日、この観察実習が実態に合ったものなのか、教師養成に有効といえるのか、との課題が付きまとっている。

2 研究の目的と方法

これまでに筆者らは、観察実習の意図が理解

しにくい現実と、「子どもに触れる」ことを期待する学生の意識との実態を踏まえて、事前事後指導の充実を指摘するとともにこの事前事後指導が短大教員個々に行われている実態を報告した（「幼児教育学科学生の初期実習-本学附属幼稚園実習の位置づけと可能性-」）。さらに、先年度の実習後の附属幼稚園教員がまとめた「実習を終えて」には、以下の学生個々の問題点が指摘されている。

- ・生活態度上の問題点（服装・身だしなみ）
- ・実習態度上の問題点（挨拶の仕方・誤字脱字を含む実習記録の記入・事前の準備不足、学ぶ姿勢がない、真剣みに欠ける、掃除雑務に自主的に取り組めない）
- ・子どもとのかかわり方の問題（笑顔で積極的にかかわる・かかわりにきっかけになる手段の準備・大人としての責任感）

これらを踏まえ、本年度、保育スタッフの変更に伴い、学生の実態に応じた幼稚園職員によ

る指導の充実を図ったところ、実習開始当初の5月から学生自身が実習に手ごたえを感じている記述が実習日誌に見られるようになった。未だ保育の学習が充分でないこの時期にもかかわらず学生自身の的確な気付きも見られだした。以後一年を通して、附属幼稚園実習を前向きにとらえ、ほとんどの学生が良いイメージを持って終えたというのが本年度の附属幼稚園教員の印象である。

この取り組みの実際をまとめるとともに、実習日誌の記述から、学生の学びを考察することにより、実感の乏しい今日の学生のインセンティブ向上の手がかりが得られると考えた。本研究は入学間もない5月中に附属幼稚園において実習をした17名の保育日誌を考察し、特徴的な記述を整理、分析するものである。

3 附属幼稚園実習の枠組みと本年度の取り組み

本学附属幼稚園実習は、「実習を通して幼稚園教育の理解を深め、教師としての責任や喜びを感じてその意識を高める。一年目から実習の機会が与えられたことを最大限に生かし、学生一人一人が積極的に参加することを期待されている。幼稚園教育において環境の最たるものは教師である。実習生一人一人が緊張感の中に幼稚園教諭としてのささやかな誇りを秘めて実習に望む」と位置づけられている。

実習は一年次、1班7～8名で4日間である。時間は9時から15時までで、その間保育観察、園内清掃、日誌記入が行われる。4日間のうち一日は、預かり保育の観察として10時から18時である。時期は、5月の連休以後12月まで授業と並行して行われる。

実習の内容は、見学=観察実習である。一日の流れに沿って、子どもの生活する姿や子どもにかかわる保育者の援助について指導計画に照

らし合わせながら観察理解に努めるものである。ほぼ一年間毎日学生が加入している附属幼稚園の保育環境は幼児の生活環境としては特殊である。学生の求めに応じたいとの思いはあっても、日々刻々成長する子どもの生活保障を考えると、全ての時間に学生が自由に子どもとかわることを実現することには多様な問題を伴う。これまで本附属幼稚園においても、観察実習の故を持って「一切子どもと話してはいけない」との指導や子どもの中心的な活動時、昼食時に実習生は別室で教材研究や日誌の取りまとめを行うことなどの措置を講じていた。

本年度は、出来るだけ学生の求めに添う体制作りとして以下の取り組みを行った。

1) これまでの担任の直接指導と日誌指導に加えて、主任による伝達・説明を毎日行った。朝15分午後45分から1時間、学生の日誌を基にして具体的な子どもの姿を通じた観察や実習の観点をディスカッションするものである。あくまでも学生の記入した項目を題材にしながら触れていった観点は次の通り。

- ① 観察の中で知る援助する保育者像
- ② 「こうでありたい」という理想や多様な疑問と実践場面の結びつき
- ③ 実践への努力（難しいけれどやってみよう）

2) 観察実習であっても、出来るだけ子どもと同じ空間に参加しやすいように、学生各グループの希望により、教材準備や日誌記入の時間、昼食の時間を子どもと一緒に保育室で過ごすことも可とした。

3 学生指導の実際

実習日誌から学生の気付き、疑問をとりあげ、次の内容に結び付けながら、4日間でおよその大切なポイントに触れられるよう指導した。

① 観察の重要性

保育者の活動は、全て子どもの観察の上に成り立ち、観察をすることにより、一人ひとりの子どもが必要としている援助を行うことができる。

② 援助者としての保育者

子どもは、“してくれる”大人ではなく、子どもの「ひとりでできるように手伝って」という要求に応じてくれる大人の存在を求めている。

③ 受容の大切さ

子どもは、皆、自分のことを受け入れ、認めてくれる人を求めている。そのような関わりの中で、信頼関係を築いていこう。

④ 「教えながら教える保育」

ともすれば、叱ったり、注意することが多くなりがちであるが、本当に、その対応が必要であるか、否定せずに「教える」ことが望ましい場面ではないか、その都度、よく見極めていく保育者の余裕が必要である。

⑤ その他

環境整備の大切さ（掃除も含め）、けんかの対応、特別支援教育、絵本について、ピアノの使い方など、学生の必要に応じて知らせた。

やすく教えていた。

- ・ 担任がどれだけ子どもたちに信頼されるようになるか、それは、子どもをよく観て、子どもに合った手伝い、手助けをするかだと思った。
- ・ 大人が子どもにとって、どう必要であるか。子どもがどういう時に大人を必要とするか。子どもが大人にどうしてほしいか。「子どもは自分でできるようになりたいと思っている」という話が、頭から離れない。
- ・ (実習生が、袋が開けられない子にやり方を教え)できた時、私は本当に嬉しくなった。「できない」というから、ただやってあげるのではなく、きちんと教えることができたので、本当に良かったと思った。

考察

保育者は、「子どもの世話をする」「何でもしてあげる」といったイメージを持っていた学生が多かったようだが、観察により、「援助する保育者」の役割に気づくことができたようだ。ミーティングで話し合ったことにより、その必要性について理解を深め、更に、子どもと関わるができる数少ない場面の中で、実践してみようと努力する姿も見られた。

《子どもへの関心》

日誌

- ・ うまく言葉にすることができなくても、子どもたちは、一生懸命何らかの形で、自分の気持ちを表現しようとする。
- ・ 小さくても、自分でできることがたくさんあるんだと思った。
- ・ できなくても、その子なりにすごく頑張っているなど、一人ひとり個人差があるので先生はその子のことをわかってあげなくてはいけないと感じた。
- ・ 子どもがそれぞれ覚えたこと、できることをフルに使い遊ぶこと、大人と違い妥協も

4 日々の日誌の中での学びの記述と考察

《保育者の役割》

日誌

- ・ 先生たちは、子どもの援助をしているのが目についた。教えてあげ、子どもが頑張っているのを見守ってあげることが大切だと実感した。
- ・ 先生は、どんなに間違っても失敗しても怒るのではなく、優しく、一つずつ、わかり

しない、みていてすごく感動した。

- ・ 大人の真似、先生の真似、友だちの真似をしているこどももいて、今の時期は、とても吸収している時期なのかなと思った。
- ・ 年長児にとっては当たり前なのが、年少児には、一つひとつの自分の仕事のようなもので、一生懸命やり遂げる姿に、とても感心した。

考察

まだ、入学後間もない実習であることを反映してか、幼児は、できることが少ない、騒がしい、泣くことが多い等々、世間一般のものと、それほど相違のないイメージで実習に臨んだ学生も多かったようだが、初日の実習が終了した時点で、「考えていたよりも、ずっと大人だった」「もっと、できないと思っていた」等の感想が多い。また、挨拶や、お礼の言葉がきちんと身につけている、友達を思いやるなどの子どもの姿から、「自分たちが子どもから学ばなくてはならない」という記述もみられた。子どもについての知識がまだ少ない時期に、実際の子どもの姿から学ぶことは、貴重な経験といえる。

《保育への関心》

日誌

- ・ 子どもを、怒って注意することをしない、その子を受け入れて認め、いけないことを教える、と聞き、すごいと思った。
- ・ 話を聞き、子どもたちの言い方、声の強さを聞いていると、大人を見て同じことをしているのだと、心が痛んだ。・・・「たくさんいるから仕方ない」ことではないということがわかった。いくら先生の資格を持っていても、しっかり一人ひとりのことを見ることができなければ、子どもにとって先生ではない。一人ひとりの“先生”になってあげなければ意味がないのだということ、今日、初めて感じる事ができた。

- ・ 子どもに気付かせるという忍耐が、保育者には必要ということを知った。

考察

学生にとって、現場の保育者による保育は、全てが手本と映ることは、ある意味当然である。実際の場面を挙げ、「すごいと思った」「そのような保育者になりたいと思った」といった記述が目立つ。ただ、一考を要するケースも中にはあり、そういった場合には、ミーティング時に話し合いの機会を持つようにした。(例：前述の指導内容、「教えながら教える」・・・「注意のできる先生になりたい」「子ども同士で注意し合っていて、感心した」等の記述には異なる視点の必要性にも理解を広げたい。

《観察実習の意義》

日誌

- ・ 数多く学んだ中で、一番大事だと思うのは、子どもたちをよく「観察」する事と「笑顔」で子どもと接することである。
- ・ 子どもを注意しなければいけない場面というのは、本当は少ないというのも、その子どもをきちんと観察していなければわからないのではと思った。
- ・ 観察しているからこそ、目の動きまでが見れ、たくさんを知ることができた。
- ・ 子どもがやりたいと思うことを、できるように声をかけてあげるためには、観察することが大切だとわかった。

考察

「せっかく幼稚園にきているのに、どうして子どもと関われないのだろう。一緒に遊んだ方が、より学べると思わないか」の問いかけに、どの学生も、例外なく頷く。初日の観察が終了した段階で、前述の指導内容「観察の重要性」について、具体例を挙げながら指導することにより、子どもとの関わりが制限されている辛さと葛藤しながらも、観察に徹することができる

この貴重な4日間の意義を認識し、より深い観察をしようと、努力する姿が多く見られた。

《意欲》

日誌

- ・土台になる時期なので、・・・一人ひとりの役に立つのなら、できることはすべてしたいと思うようになった。
- ・(特別支援教育に関して) 苦手意識や、学習不足による不適切な言葉かけなどがないような保育者を目指していきたい。
- ・自分の考えを無理に押し付けずに、子どもの考えを理解しながらも、正しいことをおしえることができる保育者になりたいと思った。
- ・子どものすべてを真正面から受け止め、受け入れられる人になりたいと思った。
- ・幼稚園の先生になりたいという夢は大きくなるばかりで、その夢を実現させるためにがんばりたい。

考察

観察を通して、「やり方がとても参考になった」「そのような保育者になりたいと思った」と感じることができる、学生なりの目標としたい保育に出会ったことにより、進路目標が明確となり、「先生になりたい気持ちが強くなった」との記述が多くみられた。入学直後の、附属幼稚園での実習において、学生がこのように感じられることは、その後の学びへの意欲においても、大変意義深いといえよう。

《喜び》

日誌

- ・子どもたちは本当に純粋で、観察していると気持ちが温かくなり、自然と笑顔がこぼれた。
- ・子どもが作った作品をくれたり、遊びに誘われたり、嬉しいことがたくさんあり、胸

がいっぱいになった。

- ・(実習クラスが) 欠席者がなく、全員そろっていると聞いて、嬉しかった。
- ・初日、不安でいっぱいだったが、先生方の笑顔の挨拶で、気持ちが楽になり嬉しくなった。挨拶の大切さを、改めて知った。
- ・今まで、話したり目を合わせたりしてなかった子どもが、私を見て、笑ってくれた。

考察

保育者にとって、子どもたちとの生活の中で、いかに喜びを感じられるかということは、必要不可欠な資質ともいえるであろう。まだ、十分な知識のない学生が、しかも、観察が中心の実習の中で、子どもを通しての喜びを経験できたなら、さらに以後の学習や実習への期待に結びつくであろう。

《その他の特徴的な記述》

- ・どの園児もそれぞれ個性を持っていて、またそれを最大限に引きだそうとする先生の気持ちと努力はすごく感動しました。
- ・クラスには、一人一人違った個性を持っている子たちの集まりだから、その子にあった接し方が、子どもの人数分、何通りもあるんだということを知りました。
- ・「皆さん顔つきが初日と全く違います。」といわれ、自分たちの成長に気付くことが出来ました。子どもたちと共に成長できたのだなと実感し、これからも学んでいくに当たっての貴重な実習期間だったと思います。
- ・ある子が私のことを「せんせい」と読んでくれるようになりました。自分はまだ子どもたちに先生らしいことを何もしていないのに、先生と呼ばれ、少し戸惑いもありましたが、実際にそう呼ばれてみてうれしかったし、今度そう呼ばれるときには自分

も呼ばれるにふさわしい保育者になっていなければいけないと改めて今そう思います。そのためにも今回の実習で色々なことを観察し、この先の参考にしていかなければいけないと思いました。

- ・なんでも最初から手助けするのでなく、やらせてみて、どうしても出来ないことはアドバイスしたり手助けすることによって成長していくんだなあと思いました。
- ・「ありがとう」と「ごめんね」をしっかり言える素直な子どもたちばかりで、子どもたちのそういった素直で正直な言葉や行動は、私が見習わなければいけないことだと思いました。
- ・今回はじめての実習を終えて、得たものはやはり「子どもを知りたい」という前向きな気持ちでした。そして、改めて私はこの仕事がしたいのだという気持ちでした。子どもが日々色々なことを吸収し、大人が知らないうちにどんどん成長していく。そして、そんな子どもたちの成長に触れ、心から喜び、自らもそんな逞しい子どもたちのおかげで成長していけるこの仕事はただ、ただすごいものだと思います。

考察

子どもたちとの触れ合いの中で感じ取り学びゆく学生の姿が現われている。一見単純な発見、学びのように見えながら、背景にある保育の本質に触れる内容への気付きともいえる体験になっている。

まとめ

① 附属幼稚園実習担当者による印象

入学直後の、専門知識をほとんど持たない状態の実習生を受け入れることは、観察実習といえども、戸惑いを禁じえなかった。しかし、保育者になりたいという目標に向かって足を踏み

出した意欲に併せ、先入観を持たないためか、実際の子どもの姿、保育者の姿から、生き生きと学ぶ姿勢に、受け入れる側も喜びを感じ、また、新たな気づきをさせられる実習であった。ミーティングでの話し合いも、吸収しようとする意欲が強く感じられ、土台となるものが少ないにも関わらず、内容の濃いものとなった。知らされたことに素直に共感し、日誌には自分なりの言葉での表現を試みたり、わずかな子どもとの関わりの時間を惜しんで実践してみようとする姿もみられ、指導する側も手ごたえを感じた。5月は、年度初めで、まだ、園児も園に慣れていない時期である。受け入れる側の負担の大きさは否定できないが、附属幼稚園での良い印象=プラスの学びが、良い保育者が育っていくための土台の一部となるなら、それは、子どもたちに生かされるものであり、附属幼稚園としては大きな喜びである。

② まとめ

学生の学びや気付きの記述の主だったものを、・保育者の役割・子どもへの関心・保育への関心・観察実習の意義・意欲が喚起された・喜びの体験・その他の8項目にまとめ、考察してきた。先行研究時の質問紙による実習の感想(自由記述)では、・職員に対して・職業への関心・保育活動への関心・子どもへの関心・観察実習の意義と方法について・反省・今後の実習に向けて・その他となっており、ほぼ同じ様な項目となっている。しかし同じような内容と思われる先行研究では、観察実習への疑問が多く含まれていたが、前述のように観察実習へ積極的な学びが表現されるなど学生の実感の変化が見られる。また「意欲の喚起」や「喜びの体験」などが多く記されたことは、肯定的な印象を四日間の観察実習中に彼ら自身が構成していったということなのだろう。具体的で応答関係のある指導体制と適切な指導者の姿勢により条件の整わない実習であっても学びを促進するのであ

る。

自己肯定感に課題を持つ若者への対応が話題に上って久しい。生活体験や実体験の乏しい若者が「人間関係のわずらわしさを内包する保育」に取り組むには、彼らの求めるものを受容しつつ、従来の指導・指摘とは異なる学生への対応により、実習に向かう姿勢の改善が可能であることが分かった。今後は、さらに年間を通じた学生の学びの内容についての分析、実習を終えての印象、以後の長期の実習を経ての感想等学生への質問紙による調査研究もを行い、学生への適切な関わり、指導の在り方を探っていく予定である。

参考文献

大滝まり子・小田進一：幼児教育学科学生の初期実習 北海道文教短期大学研究紀要第23号1999

河邊貴子他：保育・教育実習 同文書院2006

秋田喜代美他：教師の様々な役割 チャイルド社2001

(2007年1月25日受稿)

資料

「実習を終えて」(前年度＝平成17年度 附属幼稚園発行)

たくさんのグループがあり、さまざまな特性を持った学生が、実習に参加しました。その時々で、附属幼稚園の職員が感じたことのうち、共通項をいくつか箇条書きしますので、思い当たる点があれば、次回の際にお役立てください。

* 服装・身だしなみ

- ・活動しやすいということで、ジャージーやスエット姿の学生がほとんどだが、手が袖に隠れる・すそを引きずる・へそや背中が見える・上着を腰に巻くなど、子どもたちのお手本にならない状態を全く気にしない。
- ・男女とも髪型・化粧・つめなど普段の学生生活の状態のまま持ち込むのは学外実習では絶対に許されない。実習に入ることをもっと大切に考えて欲しい。

* 挨拶

- ・元気に挨拶するのは良いが、同じ先生に何度も声かけをするのはどうか。時と場所を考え、会釈や目礼で済ますことも良いのではと伝えたが通じないようだった。「おはようござーいませーす。」「ありがとーござーいませーす。」と伸ばして話すのは聞き苦しい。

*実習日誌

- ・誤字脱字が多い。自分の日記帳と勘違いしているような内容のものがある。ページを多く使うことが良いと勘違いしているのか大きな文字で書いたり、同じような事柄を繰り返し書き並べるものもある。実習日誌は必ず提出するものであるから、明確に読み手に内容が伝わるのが大切である。実習記録の書き方に関しては、学外実習の前には是非図書館でそれに関する資料に目を通すべきである。

*実習態度

- ・春のオリエンテーションの際に渡っているプリントを全く読んでいないため、毎回同じことを繰り返し話すことになる。自分が何を学ぶために幼稚園にやってくるのかを認識していない。自分の行動に予測を立てない。心配しない。分からないと思われたくないのか「ハイ、分かっています」と答える。また分からないことでも、確認せず行動する。注意されると「教えてもらっていません。」「でも、〇〇ですよ。」と言い返したり、「〇〇先生が～と言いました。」と有りもしない事を言う。
- ・例え、短い実習でも、取り組みの姿勢によって多く学ぶことが出来る。それを理解している学生とそうでない学生では大きな差が見られる。
- ・誰のための実習か良く考えてほしい。
- ・ノートの整理の時間を自由時間と勘違いし、許可なく黙って園を出て行ったり、ソファに寝転がって携帯電話でメールをするなど、考えられない行動をとる者もある。一人のおろかな学生のためにグループ全体が悪い印象を持たれる恐れもある。学外実習では、大学のイメージやあとに続く学生のためにも実習生一人一人の言動が様々な影響及ぼすことへの自覚が必要である。

* 掃除

- ・掃除は手伝わされていると考えているのか、はっきり、面倒くさいと口に出すものもある。終

わっていないのに、掃除したという。「ここはやりましたか?」と聞く「言われませんでした。」と答える。掃除のない実習はありえないので、各自自主性と工夫でこなすことが大切。使ったものはあったところに戻す。雑巾は洗って干すこと。それをするだけでも、仕事振りがすっきりして見える。

*** 預かり保育**

- ・ 預かり保育の園児より実習生の数が多いためか、子どもに気を向けず学生同士のおしゃべりが過ぎる。何をしに来ているのか分からないグループもあった。

*** 子どもとの関わりかた**

- ・ 参加実習があることは分かっているのだから、自分なりに予想し、どんな参加の仕方が出来るのか考えておくべき。鬼ごっこや手遊び・歌など子どもとのあそびのきっかけとなる手段を身に付けておくと良い。
- ・ 笑顔で、何事も積極的に取り組む姿勢が必要。
- ・ 子どもとの遊びが夢中になり、やりすぎてケガにつながる。実習生の立場を意識し責任感を持つこと。
- ・ 子どもに自分を気に入ってもらいたがり必要以上におだてたり、チャホヤしがち。
- ・ 子どもの命令を聞き、何でも言うとおりにすることが、子どもと遊ぶことがと勘違いしている。
- ・ 園児の年齢やそれぞれの様子を良く観察し、子どもが考えたり感じたりする力を大切にしてほしい。少しのかかわりしかもてない実習期間ではあっても、保育者としての意識を持って働きかけることが必要である。

Abstract

Before commencing their specialized study, our students observe the classroom activities of Hokkaido Bunkyo College's kindergarten. The students do not participate in the lesson and they are not directly involved with the kindergarten students. Because of this, the students do not feel that this class observation is a good experience. Due to the introduction of the college students to the classroom, the kindergarten teachers have changed their methods for including the college students. The college students feel that this has greatly improved the observation portion of their course. I would now like to discuss further the possibilities of these observation periods.